

時代小説の楽しみ 九

維新の群像

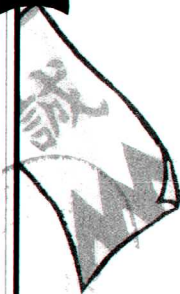
新潮社



時代小説の楽しみ 九

維新の群像

新潮社



維新の群像 時代小説の楽しみ⑨

著者 司馬遼太郎他

印刷 一九九〇年二月二十五日

発行 一九九一年一月五日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(3266)五一一一 編集〇三(3266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

目

次

桜田門外の変

司馬遼太郎 7

策ノ目万兵衛門外へ

山田風太郎 41

猿ヶ辻風聞

滝口康彦 83

詰腹競争

船山馨 117

水戸天狗党

柴田錬三郎 137

三絃の志士

古川薫 157

竜馬を斬った男

早乙女貢 175

冤（えん）

綱淵謙錠

235

橋を渡って

陣出達朗

271

小栗上野介

海音寺潮五郎

303

西郷暗殺の密使

神坂次郎

345

旗岡巡查

吉川英治

365

雨の音

子母沢寛

413

編者解説

縄田一男

437

装画・赤坂三好

維新の群像

時代小説の楽しみ⑨

桜田門外の変

司馬遼太郎

司馬遼太郎（しば・りょうたろう）

大正十二（一九二三）年、大阪市生れ。大阪外語大学蒙古語部卒業。学徒出陣し、戦後は新聞記者として勤める。昭和三十四年『梟の城』で直木賞を受賞。以後『燃えよ剣』『竜馬がゆく』『国盗り物語』『坂の上の雲』『翔ぶが如く』『項羽と劉邦』など旺盛に歴史小説を発表。四十七年吉川英治文学賞受賞ほか、文学賞多数。『司馬遼太郎全集』全五十巻（昭和四十七年、文藝春秋）がある。

一

桜田門外の事変であまねく知られている有村治左衛門兼清が、国許の薩摩から江戸屋敷詰めになつて出府したのは、事件の前年、安政六年の秋のことである。二十二歳。

「江戸にきて何がいちばんうれしゅうございましたか」

と、さる老女からからかい半分にきかれたとき、

「米のめし」

と治左衛門は大声で答えた。薩摩藩士にはめずらしく色白の美丈夫で、頬があかい。外貌どおり、素直すぎるほどの若者だつたのであるう。

江戸藩邸では、中小姓勤役という卑役をつとめた。

江戸ははじめてではあるが、次兄の雄助が一足さきに江戸詰めになって裁許方の書記をしていたので、諸事、その引きまわしを受けた。

藩邸にわらじをぬいだその日、兄雄助は、

「治左衛門、江戸に來た以上、命はないものと覚悟せよ」

とひくい声でいった。

「心得ていますとも」

そのつもりで、江戸詰め運動をしてやってきたのである。

「これは風懷ふうかいでござすが、辞世のつもりでもあります」

と、煙管きせるをとりだした。その柄えに、

磬いっ、鉄かねも、摧くだかざらんや、武士あゐが

国安かれと、思ひ切る太刀たち

と、こまごまときざまれていた。

(まずい歌ではない)

と、雄助は弟の意外な才能におどろいた。母ゆずりかもしれないと思った。母は歌学の達者である。

「つくったのは、おはんな？」

「左様でござんど」

長兄は有村俊斎(のちの海江田武次・維新後子爵)、次兄は雄助。この三人兄弟のなかで、治左衛門が

もつとも詩才があつたようである。

腕も立った。国もとで示現流じげんの名人といわれた葉丸半左衛門やぐまるに学び、兄弟中の出色である。「天稟てんげん

がある」と師匠からいわれた。

治左衛門が出府して数日後、次兄雄助は、藩邸から遠くもない西応寺町の借家にすむ後家のもとに

つれて行った。

「弟の治左衛門でござすが、われわれともども、お叱りを願ひもすで」

と、雄助はひどく鄭重ていじゆうに紹介した。未亡人はお静といい、齢は四十前後。が、年より早く嫗おんなさびて

いるのは、よほどの艱難かんなんをへてきたからであらう。

「江戸にきて一番うれしかったこと」

「江戸にきて一番うれしかったこと」

をきいたのは、彼女である。よく笑うひとで、美しい水戸の武家言葉をつかった。言葉のはしはしに漢籍の素養の匂うひとで、多少鼻にはついたが、並な婦人ではなかった。

日下部家には娘がいる。松子といった。小柄で、小さな泣きぼくろがある。治左衛門は、薩摩領でも、都城の大田舎から出てきて、はじめて口をきいた江戸娘はこの松子だったから、初対面の印象は痛いほどにあざやかであった。例の、

「米のめし」

と大声で答えたとき、松子はつつしみも忘れて、唇に手の甲をあて、母親から眼顔で叱られた。そのあと、顔をふせ、懸命に笑いをこらえているふぜいが、治左衛門にまでおかしかった。

帰路、

「兄上、いまのご婦人はどなたでござす」

ときいた。

「馬鹿じゃな」

雄助はあきれた。相手を何者ともわからずにほんやりすごしていたらしい。

「あの婦人たちは日下部伊三次殿のご遺族じゃ。そげんほんやりしちよると、大事バ挙げられんど」

「あんとき兄上が教えてくれんじやったもんで、知り申さんのも仕方が無か」

「仕方が無か？ オイが忘れてたちゆうならそのときオイに訊くがよか。そげな粗漏では大事バ為せんど」

「こんどから訊き申そ」

治左衛門は、のんびりしている。あれだけの激しい歌をつくる若者とはどうしてもみえなかった。

（まあ、江戸に馴れぬせいじゃろ）

雄助はおもった。

この三人兄弟は、極貧のなかにそだった。父有村仁右衛門は藩の裁許方下役をつとめていたが、嘉

永二年、家老某を面罵したために職をうばわれ、その後は毎日の食事にも事欠く日がつづき、
(よう生きてこまできたもんじゃ)

とおもうほどの暮らしだった。老父は処世にはむかぬ木強漢で、たとえば、お役御免のち生計のために刀鍛冶になる、とまではよかったが、その下稽古にまず庖丁をうった。治左衛門は幼かったから、俊斎、雄助が対槌をうたせられたが、なにしろ鍛冶小屋が貧弱すぎたために、ある夜、風に吹きちらされてしまい、「風ドンまでオイにさからうか」と腹をたてて、一本の庖丁もつくらずじまいだった。

その後一家は、都城尻枝村にひっこみ、荒地を開墾してかろうじて翌年からカライモの収穫を得て、飢えをしのぐことができた。

(しかしこいつは末っ子じゃけん、そういうドン底の苦勞を知らずに成人したもんじゃろ)

と雄助はおもった。なるほどそう思ってみると治左衛門には末弟のおぼこさがあつて、なかなか可愛くもある。

長兄の俊斎は、なかなか世才に長けた男で、家計をたすけるために十一のときからお城の茶坊主に出で、給米四石をもらい、さらに十四で数寄屋坊主になり、その後ふとしたことから西郷吉兵衛(吉之助・隆盛、大久保一蔵(利通)と相知り、莫逆の仲になった。

この三人が、当時天下第一の賢侯といわれた前藩主斉彬に愛され、斉彬という天才から当時としては最も進んだ世界観の洗礼をうけたために、幕末の薩摩藩士のなかでもっともはやく風雲のなかに突出することになった。

いま、その長兄俊斎は京都藩邸にいて、井伊斬奸計画の京都工作に奔走している。人物は小さいが薩摩の代表的な「志士」の一人としてすでに著名な存在であった。

「治左衛門」

と、雄助はいった。

「いずれ、水戸の盟士とひきあわせるが、機転がきかねば、輕侮をうけるぞ」

「兄上、要するに彦根の赤鬼（大老井伊直弼）を討てばよいのでしよう。私はそれだけを一念として国から出てきています。機転をきかさねばならぬような仕事は、長兄の俊斎どのにまかせておきます」

（こいつ）

憎くなるほど、理の当然のことをいう。あるいは治左衛門という若者は、刺客として最適な性格のもちぬしかもしれない。

二

その後、治左衛門は、兄雄助が、

「日下部殿の御遺族」

と教えた家に、しばしば足を運んだ。薩摩藩邸の有志の密議は、多くこの借家でおこなわれたからである。

この家の仏壇に祀られている、

「日下部伊三次」

という名前ほど、薩摩藩の尊攘有志の血をかきたてる名はなかった。幕末の薩摩藩が、最初に出した国事殉難者である。

井伊に殺された。

日下部伊三次は維新史にとって一種の運命的な存在だった。薩摩藩士だが、同時にかつては水戸藩に禄を食んでいたという、いわば水戸藩属の存在であった。

父の名は、連。もと薩摩藩士であった。事故があつて脱藩し、水戸領高萩で私塾をひらいているうちに水戸藩主斉昭（烈公）に知られ、その子伊三次が召しだされた。

伊三次はその後、藩主に請うて、亡父の藩であつた薩摩藩に復帰することをのぞみ、両藩主に許された。

伊三次は水薩の接着剤の役目をつとめた。当時、水戸藩は尊王攘夷の総本山といった絢爛たるふんいきがあり、天下の志士から一種の宗教的な翹望をうけていたが、薩摩藩がもつともこれに接近することができたのは、ひとつには前藩主斉彬が水戸の斉昭に私淑していたからでもあるが、日下部伊三次がその橋渡しの労をとったことが大きい。

とくに、西郷、大久保をはじめ治左衛門の長兄俊斎の三人は、日下部伊三次の手びきで早くから水戸の名士と相知ることができ、このことがかれらに重大な影響をあたえた。

その伊三次が、去る安政の大獄で逮捕され、江戸伝馬町の牢で言語に絶するような拷問のすえ衰弱死した。同時に捕縛された長男祐之進も、その翌年、牢死。

日下部家には、女だけが残された。

が、静子は尋常の未亡人ではなかった。

「井伊を倒さなければお国がつぶれる」

と、夫が生前にいった言葉が、そのまま彼女の生活になっていた。

彼女にとって井伊直弼という男は夫と長男の敵だが、その私的な敵が同時に天下有志の「公敵」になっている。彼女は彼女なりに、生活をあげて井伊討殺の事業に専念したというのは、当然というべきであろう。

有村治左衛門は、ある日、兄の雄助に、

「ひと足さきに日下部家に行っておれ」

といわれて、お静の宅をたずねた。

この家は、訪ね心地がいい。後家殿のお静も親切だし、娘の松子も、治左衛門に好意をよせているようであった。